

東恩納寛惇と沖縄史学の展開

並 松 信 久

目 次

- 1 はじめに
- 2 沖縄復興をめぐる論争
- 3 歴史学への途
- 4 沖縄史の実証的研究
- 5 沖縄史への視点
- 6 歴史学の構築
- 7 沖縄史学の基礎
- 8 結びにかえて——歴史学の課題

要 旨

東恩納寛惇（1882-1963、以下は東恩納）は近代沖縄を代表する沖縄史研究者である。東恩納は東京帝国大学文科大学においてドイツ実証主義史学の影響を受け、文献の考証を中心とする実証主義的な史学を学んだ。大学卒業後に法政大学、拓殖大学などで教鞭をとる傍ら、沖縄史および琉球史に関する史料蒐集に努め、その分析を通して多くの研究成果を残している。しかし東恩納についてはその研究業績が取り上げられることが多いものの、東恩納という人物をとり上げた研究は皆無といってよい。本稿は東恩納の経歴をたどりながら、東恩納が沖縄史学を形成していった過程を追った。

東恩納は実証的な歴史研究に終始した研究者である。東恩納の研究業績を分類すると、大きく四つに分かれる。すなわち、(1) 琉球の貿易に関する研究、(2) 地名人名の研究、(3) 琉球の文化に関する研究、(4) 主要な古典の校注、である。これらの研究業績に共通しているのは、徹底した実証主義に基づいていたという点である。東恩納は在京のままで史料分析によって多くの研究業績を残した。東恩納の沖縄史学は、戦後の沖縄問題を考えるきっかけを与えている。

戦後の沖縄では、東恩納が在京のままで、郷土の現状認識が欠落しているという理由で、歴史を振り返ることには無理があると指摘されたこともあった。また東恩納は実証主義史学に徹しているにもかかわらず、戦後になって強引ともとれる発言をして批判されている。しかしこれは沖縄の現状に対する危機意識の現れであった。東恩納は戦後沖縄の復興状況をみて、精神面での復興を訴えて、沖縄の人々に精神的な自立を求めた。

東恩納の沖縄史学には、強烈的な郷土意識が流れている。しかしながら東恩納の研究は郷土意識に流されることなく、実証主義に徹していた。その研究は日本に残る史料類だけでなく、広くアジア地域に残る史料類を蒐集して、アジアとの関連を視野に入れた先駆的なものであったといえる。

キーワード：東恩納寛惇、沖縄史学、琉球史学、実証主義史学、沖縄渉外史

1 はじめに

東恩納寛惇ひがおんなかんじゅん（1882-1963、以下は東恩納）は近代沖縄を代表する沖縄史研究者である。1908（明治41）年に東京帝国大学文科大学史学科を卒業後、府立高等高校や法政大学、拓殖大学などで教鞭をとっている。教鞭をとる傍ら、沖縄史および琉球史（琉球は主に琉球王国時代のことを意味する）¹⁾に関する史料蒐集に努め、史料の分析を通して多くの研究成果を残している。東恩納が集めた史料や東恩名が執筆した著書は、沖縄史研究において欠かせないものとなっている。

筆者は前稿において、伊波普猷（1876-1947、以下は伊波）が「沖縄学」を形成する過程を考察した²⁾。伊波は沖縄学の体系化に至っていなかったものの、沖縄の個性と日本への同化をめぐる伊波の考察が、沖縄学の発端であった。本稿で考察対象とする東恩納も、伊波とほぼ同世代であり、伊波と同様、東京帝国大学文科大学へ進み、沖縄研究を志している。そして両者はともに沖縄の歴史研究を中心におき、この結果、後世の沖縄研究に多大な影響を与えた。東恩納は伊波や真境名まじきなあんこう安興（1875-1933、以下は真境名）らとともに、沖縄学の基礎を築いたといえる³⁾。伊波と東恩納は沖縄学の形成という点で類似の研究活動を行ってきた。伊波と東恩納の異なる点をあげれば、伊波が一旦沖縄へ帰郷して、実践的活動に携わり、それが後の沖縄学の形成に直接的な影響を与えたのに対して、東恩納は在京のまま研究者としてぼう大な業績を残したことであった。

伊波と東恩納の違いは、その後の伊波と東恩納という人物の取り上げ方の違いとなって現れている。伊波は実践的な活動に携わったこと、沖縄学の形成に直接的に携わったことによって、注目されることが多く、伊波を対象とした研究成果は数多く存在する。しかしながら東恩納はその研究業績が取り上げられることが多いものの、東恩納という人物を取り上げた研究業績は皆無といってよい。伊波に比べて東恩納はほぼ無名の存在といってもよい⁴⁾。管見の限りでは、東恩納の人物に焦点をあてた研究は、喜舎場一隆「東恩納寛惇論——評伝のための素描」（『新沖縄文学』、第32号、1976年、24～34ページ）のみである。本稿では戦後の沖縄において、東恩納の歴史学がどのように位置づけられたのかをみることからまず始め、東恩納の経歴をたどりながら、東恩納がその独自の沖縄史学を、どのように形成していったのかを追っていくことにしたい。

本題に入る前に、東恩納の略歴を年表風に追ってみる⁵⁾。東恩納は1882（明治15）年に那覇市で下級士族の家に生まれる。沖縄県尋常中学校を経て、熊本の旧制第五高等学校（以下は五高）へ進学する。尋常中学校時代は、伊波や真境名などの4年後輩にあたる。つづいて東京帝国大学文科大学史学科へと進み、国史を専攻している。1908（明治41）年に「琉球方面より見たる島津氏の対琉政策」と題する卒業論文を提出して卒業する。

1910（明治43）年に私立東京中学校の教諭となり、その後、高千穂中学校、東京府立第一

中学校の教諭を経て、1929（昭和4）年に東京府立高等学校の教授となる。この間、1913（大正2）年から1923（大正12）年までの約10年間にわたって、沖縄県学生寮であった明正塾の舎監を兼務している。1933（昭和8）年には東京府の在外研究員として、中華民国と、安南・シャム・ビルマ・インドなどの東南アジア諸国に「隋唐以後の日中関係」調査のために約1年間にわたって滞在する。帰国後は法政大学や拓殖大学などの講師を兼務している。戦後の1949（昭和24）年には新制の東京都立大学を依願退職し、それ以後、1963（昭和38）年まで拓殖大学教授をつとめている。

東恩納による沖縄の歴史研究は東京帝国大学文科大学在学中から始まり、その成果は『歴史地理』誌や『史学雑誌』をはじめ、『琉球新報』紙にも発表されている。そのなかでも東恩納が研究者として歩み始めた出発点といえるものは、吉田東伍編『大日本地名辞書』続編（第二琉球）の業績であった⁶⁾。この底本にあたる論考は、東恩納が文科大学在学中の1908（明治41）年に、国史学の三上参次（1865-1939、以下は三上）教授を介して執筆依頼を受けたものであった。それ以後、東恩納は琉球研究に関する著書を数多く発表している。たとえば、『尚泰侯実録』（1924年刊）、『琉球人名考』（1925年刊）、『黎明期の海外交通史』（1941年刊）、『南島論攷』（1941年刊）、『六論衍義伝』^{りくゆえんぎ}（1943年刊）などである。

伊波が言語・民俗・歴史などの多方面の研究を行なったのに対して、東恩納は実証的な歴史研究に終始した研究者であった。東恩納の研究業績を分類すると、大きく四つに分かれる。すなわち、(1) 琉球の貿易に関する研究、(2) 地名人名の研究、(3) 琉球の文化に関する研究、(4) 主要な古典の校注、である。これらの研究業績に共通しているのは、徹底した実証主義に基づいていたという点である。東恩納は在京のまま、史料分析によって多くの研究業績を残した。

東恩納による沖縄史学は、戦後の沖縄問題を考える場合の出発点となっている。1948（昭和23）年に沖縄県関係の行政機構が廃止され、沖縄県が消滅するのにもない、外務省における研究会で沖縄に関する認識を深めるべく、東恩納は実証主義に基づく沖縄について講演している。このとき東恩納は「概説 沖縄史」と「沖縄涉外史」を講演して、沖縄の歴史と帰属問題について語り、戦後の沖縄認識の基礎を与えているのである。

2 沖縄復興をめぐる論争

戦後日本にとって米軍占領の状況下にある沖縄復興が大きな課題であったことは、いうまでもない。その際、当時の志喜屋孝信（1884-1955）^{しきやこうしん} 沖縄民政府知事（後に琉球大学の初代学長）を中心に説かれた考えがあった。それは郷土復興の倣うべき模範として、琉球史において「第二の黄金時代」と称される尚敬王（1700-1752）と宰相の蔡温（1682-1762）⁷⁾ の時代に学ぶべきであるという考えであった。

これに応える形で刊行された蔡温^{ひんり}『独物語』(山田有功口語訳、琉球文化研究会、1950年)という著書に、郷土史家の島袋全発^{ぜんぱつ}(1888-1953、以下は島袋)が「蔡温小伝」を寄稿して、蔡温の業績を高く評価した⁸⁾。島袋はさらに尚敬王と蔡温を評価するだけでなく、その前段ともいうべき薩摩侵攻後の困難な時期に、琉球復興の基盤を形成した尚貞王(1645-1709)と国相^{しょうしょうけん ほねじちやうしやう}の向象賢(羽地朝秀, 1617-1676)も評価すべきであると語った⁹⁾。

この向象賢の評価をめぐる、島袋と東恩納の考え方には違いがあった。向象賢の評価は戦後の沖縄復興を課題として生まれたものであったので、この考え方の違いは、向象賢に関する評価の違いということだけではなく、米軍の占領下で、沖縄の将来の方向をどのように考えるのかという点での違いも反映されたものであった。戦後沖縄の歴史と思想史を考察するうえで、二人の見解は重要な論点を内包していた¹⁰⁾。

東恩納は、米軍占領下の郷土沖縄の惨状と比較する事例として、薩摩侵攻後の時期をあげ、向象賢の統治について語っている¹¹⁾。東恩納は、

向象賢の政治は沖縄のルネッサンスであったとも云えましょう。つまり一切の不合理的を合理化した事業、一切の迷妄から民族性を解放した事業であったのであります。世間或は、向象賢の日琉同祖論は、政策上から出た打算的のものであったと見る向もあります、私は左様には考えませぬ。世鑑は彼が国相に任じて政治の衝に当たる時から十七年も前に出たものでありまして、決して時代に迎合する意図から出たものではなく、深い信念から書かれたものでありましょう¹²⁾。

というように、向象賢の統治を評価する(世鑑とは、1650年頃に成立した『中山世鑑』^{ちゆうざんせいかん}のことであり、向象賢が王命によって編纂した琉球王国で初めての正史であった)¹³⁾。東恩納は向象賢の日琉同祖論が政策上の打算や時代への迎合から出たものではなく、確固たる信念から生まれたものであると語る。この信念は向象賢が勝利者である大和を再認識^{ヤマト}することに由来しているが、当時の沖縄の復興のあり方が、勝利者であるアメリカを再認識し、それに迎合するだけで終わっては断じてならない。我々は真理に帰るのであって、アメリカに帰るのではないと訴えている。

この講演の論点を明確にしたものが、東恩納の著書『校註^{ほねじしおき} 羽地仕置』(興南社、1952年)¹⁴⁾であった。東恩納は、この著書に対日講和条約の発効により、米軍占領の長期化が決定的となった状況下で発刊した。この著書の序文において東恩納は、

ここに考へ度い事は、彼れが、現実にあつて心にもなき迎合を事としたのでは断じてなく、本土の源流に復帰する事が真実の在方であるとする深い堅い信念を有ち、この信念を貫くためには、身命をさへ抛出す覚悟を有してゐた事である。この信念は、後出の碩学程

順則や蔡温もまたこれを是認した。

向象賢は、国家の面目を保つ為めには、一身元より惜しむ所にあらずとしてゐたが、我等の郷里の現状が、慶長終戦直後のそれと酷似してゐる事に想到した時に、仮令時勢がちがつて、忠孝もなく、恭儉もなく、なまじい民主の名の下に、目前の生活のみが、唯一の目標となつて来たとは云ひ条、成敗を未然に惧れて現実の勢力に迎合するを以て能事とし、民族の面目、真実の帰趨を顧みないやうな事は、我が向象賢の為さざる所であつたらう事を痛感する。

向象賢は英雄でも豪傑でもない。一片の私心なき熱血良識の指導者であつたに過ぎない。執政十年昼夜精根を傾け尽して所信に邁進し竟に負荷の大任を完遂した。今や終戦後七年、不幸にして一向象賢の出づるなく、我等の郷国が、解体のままに曝されてゐるのを愧ぢ、即ち彼れを地下に喚び起して警世の木鐸を叩かしめんとし、仕置を通じてその精神に触れんとする所以である¹⁵⁾。

と強い調子で語っている。

東恩納は向象賢の「羽地仕置」（仕置は必要に応じて廻文の形式で出され、場合によっては條書にして各役所に掲示された）を校注解題することによって、米軍占領下の沖縄の思想状況を質す意味をもたせた。東恩納による解釈は、「一九五二年当時の沖縄を取りまく社会情勢中の『発言』になっている」¹⁶⁾といわれる。この東恩納の問題意識は、1952（昭和27）年12月20日に行なわれた「向象賢先生顕彰会」での講演「沖縄文化史上に於ける向象賢先生の位置」¹⁷⁾においても、繰り返し語られる。東恩納は、

今日の時代は、七百年前の察度時代と同様、第三国の大きな勢力によって、脅威誘惑されています。この脅威と誘惑とは、一層深刻な混濁を吾々の思想界に及ぼすものであります。

この混濁から免かれる為めに、吾々は第二の向象賢、第二の世鑑を必要とするものであります。而して、必要条件として、まづ報本反始・万殊一本の道理を提示すべきであります¹⁸⁾。

と論及する。今日の沖縄思想界が混迷に陥っているとした上で、現在の向象賢や世鑑が必要であると訴えている。

この東恩納の解釈に対して、島袋は1953（昭和28）年に『琉球新報』紙において、東恩納の著書『校註 羽地仕置』に関する書評を出している。島袋は東恩納の認識に対して、

著者は向象賢先生二百七十七周年に「後学東恩納寛惇敬白」として自序を書いたのでも

察せられる通りに、研究家の範疇は脱して崇敬家の態度を持してられ、またその序文によって一種憂国慨世の気魄をもって、執筆せられたことがわかるが、残念ながら、その現在の郷土観はいささかのはずれたものがあり、また向象賢の見方についてもいささか批判的態度をとって頂いたらと思うのである¹⁹⁾。

と語っている。島袋は東恩納がやや感情に走りすぎているので、もう少し客観的に、あるいは批判的にみるべきだと主張している。島袋は東恩納の歴史解釈の誤りを指摘しているわけではない。東恩納の郷土観が的外れであると語っているように、東恩納の現状認識の甘さを指摘しているのである。

この書評の後半部において、島袋は東恩納の著書の意義を述べつつ、

ただそういうエライ人々の考えたり、なしたりしたことを「直ちに」今日の時代にあてはめようとしたり、あてはめさせようとしたりすることが無理なだけである。むしろそういうエライ人々が今日存在していたら、どういう考え方をし、どういう事をしたであろうかを研究することは大切なことである²⁰⁾。

と指摘する。島袋は東恩納が歴史上の人物の事績や思想を、今日の問題に強引に「あてはめようとしている」と批判する。ただし島袋は、この書評に「郷土を憂えた尊い先人の精神」という副題を付けているように、「今日存在していれば」という仮定のもとで、その精神や事績を考えることは意味のあることであるという。結局、島袋は東恩納が在京のまま郷土の現状認識を欠落したなかで、歴史を振り返ることに無理があると考えていた。

島袋は当時、在京の東恩納とは異なり、沖縄民政府の首脳のひとりとして、沖縄復興に尽力していた。実際に復興に携わる人間として、東恩納の歴史に対する認識とは異なっていた。しかしながら、現状に対する歴史の強引な適用を避けることは当然としても、注目すべき点は、東恩納がなぜ強引ともとれる主張をしているかである。東恩納は主観的な歴史記述を繰り返していたわけではない（後述）。むしろ主観的な部分を極力排した実証主義史学に徹している。東恩納は「実証主義史学の面目をいかんなく発揮している。全く駄文蛇足などは見受けられない」²¹⁾と評されるほどであった。確かに島袋のいうように、東恩納による戦後の沖縄に関する認識にズレがあったのかもしれないが、東恩納の学問に対する姿勢から考えて、強引ともとれる主張には違和感がある。おそらく東恩納が戦後の沖縄を憂える気持ち、あるいは沖縄の現状に対する「危機意識」といったものが、上記の引用のような記述をもたらしたといえる。

東恩納は同じ著書『校註 羽地仕置』の序文（前述の引用文）において、沖縄の指導者やその現状認識に対する批判を行なっている。東恩納はその危機意識に基づいて、当時の沖縄の指導者を批判している。おそらく島袋にとって、この東恩納の批判は島袋にも向けられた批判で

あったと受け止めたにちがいない。書評における島袋の批判的な指摘は、このことに対する反批判であったともいえる。

しかし、それ以上に両者の立場から生ずる違いがあった。島袋は「島々の帰属」という論考において、かつて向象賢や蔡温が唐や大和との三角関係を円滑に結ぶことによって、沖縄の「孤島苦」を救済した事例をあげている。島袋はこの事例に基づいて今回の戦争による孤島苦が、アメリカの寛大な政策によって虚脱状態から立ち上がるに至ったので、帰属問題を論ずる際には慎重な態度をとる必要があると語る²²⁾。これに対して東恩納は、

往時の孤島苦の救済の問題であっても、それ等はすべて沖縄が弱小王国としての地位を維持せんとする誤謬から出発したもので、その誤謬は明治維新以来完全に是正され、民族意識の闡明に依り再出発したものである以上、今更これを往昔の封建割拠時代に引戻して孤島苦を云々し、その孤島苦から脱出する手段として、現勢に順応すべしとする意見には同意出来ない²³⁾。

と反論する。東恩納によれば、往時の孤島苦救済の問題は明治維新以来、是正され、沖縄は日本国家や日本民族の意識をもつことによって再出発したという。したがって今回の孤島苦を解消する手段として、現勢に順応するという意見には同意できないとしている。

さらに東恩納は、復興問題は民族的自覚にまで深められているとして、

近世沖縄の発達には、この自覚から生れて来たものである事は云うまでもない。然るを何ぞや、今頃の災厄に逢って、再びこの自覚を捨て異国の袖にすがらんとするのは、自ら孤児として家出せんとするに、等しいものである²⁴⁾。

と厳しく批判する。東恩納と島袋の意見には、東京で発信を続ける東恩納と、沖縄在住で実際に戦後復興にあたっている島袋との立場の違いが明らかに出ている。在京であるがゆえに、あくまでも信念に基づく行動を期待する東恩納と、沖縄の現場での慎重な態度が求められる島袋との違いであった。

ちなみに東恩納は戦後、「千年の歴史を破壊した米軍のいる沖縄は見たくない」と沖縄へ行くのを拒否し続けていた。しかし1958（昭和33）年11月に約20年ぶりに帰省し「沖縄が思ったより復興しているのは米国の政策に思ったよりよい面もあると思う」²⁵⁾といったとされる。実際に沖縄の地をみた東恩納は、予想よりも復興が進んでいる状況に、

アメリカはこういう情実に一切りなく、いわば民族意識や民族理念を無視して、沖縄を白紙にかえし、その上にアメリカが好むままの図面を引いたからである。このような思い

切った処置は、アメリカの功であると同時に過でもある。功過いずれが大であるかは見る人によってちがおう。けれども、少なくとも沖縄の物質面だけに重点をおいて、その精神面を軽視もしくは無視した非難は免がれまい。そこで問題は、沖縄は今、その失われた精神面を取りもどさねばならぬという点にある。そうでなければ、仏造って魂を入れぬことになるからである²⁶⁾。

という感想を述べている。東恩納は物質面では確かに復興を遂げているようにみえるが、問題は精神面での復興であるという。

ところで東恩納は、当時の島袋の言行について、

是等の述作は、私の知る限りでは、一二を除く外は、終戦後、君が或は占領軍の顧問として或は琉大講師として、又或は新報主筆としての地位に在り、言論が宣撫工作の枠内に、はめ込まれていた頃の執筆に係るものである。従って、それ等を読んでいると、書いたものではなく書かされたもので、書いている間に、本人自身もいつのまにか、そんな気になったものではないかと考えさせられる事が多い²⁷⁾。

東恩納によれば、当時の島袋は占領軍の意図にそって、書かされたものが多かったのではないかと想定している。さらに東恩納は島袋の遺稿について、

これを書く前に私は遺稿の全部を読みなおした。けれども、その中には論旨が全発君の真の心持を伝えてはいないものもあるような気がして仕方がない。彼れは表面上復帰運動に警告を与えるような態度を取っていたが、それは彼れの心底からの声ではなかったような気がして仕方がない。

そこばくの原稿書いて溜息と、ともに寝ころぶ畳の上に

老いづきて心濁るとうたひける、うべなはんとし憤ろしも

案の定わが西幸夫はかく歌っている。彼れも戦争犠牲者の一人であったのだ²⁸⁾。

と語っている。東恩納は当時の島袋の立場に配慮をみせているが、この東恩納の指摘が、実際にその通りであったのかどうかについては、今のところ確かめることはできない。

しかし東恩納の指摘は島袋に配慮をみせているようにみえる反面で、島袋の「心情に立ち入ることがなく、戦後沖縄の指導者の苦悩に思い至るところがない発言」²⁹⁾のようにもみえる。実際には東恩納と島袋との交際は長く続き、親しい仲であった。東恩納は後に『島袋全発著作集』の序文を依頼されたとき、島袋のことを「注釈なしに郷里を語れる人」³⁰⁾と述べていることから、島袋に対して絶対的な信頼を寄せていた。しかしながら、この二人は東京と沖縄と離

れて暮らしていたので、頻繁に会うこともなかった。東恩納によれば、島袋は人の喜びを喜び得る「愛想人」であったが、人の悲しみを悲しみ得る「人情人」ではなかったという³¹⁾。もし東恩納のいう通りであるとすれば、両者は親しい間柄であっても、お互いの苦悩に思い至るような間柄ではなかったといえるのかもしれない。

結局、東恩納と島袋の両者の議論の対象となった向象賢に関する見解の違いは、それほど大きなものではなかった。むしろ両者が向象賢の姿勢や思想を学びながら、それぞれの生き方と重ね合わせたといえる。東恩納は向象賢を沖縄復興に必要とされる「深い堅い信念」の人と考えたようであり、その一方で、島袋はこの向象賢の思想に学びながら、慎重な態度で沖縄復興に尽力したといえる。以下では、両者が沖縄復興の手がかりにしようとした歴史および歴史学について、東恩納を中心にしてどのように形成されていったのかを考えていく。

3 歴史学への途

東恩納が沖縄県尋常中学校へ入学したのは1895（明治28）年であった。この年の秋には、尋常中学校で最上級生であった伊波や真境名などを中心とするストライキ事件が起り、結局、伊波は退学している。しかし当時の東恩納は、中学校の重大な事件であったにもかかわらず、この事件についてはほとんど語る事がなく、政治的な運動にはあまり関心がなかったようである。

東恩納は1900（明治33）年に尋常中学校を卒業後、2年間の浪人時代を送り、その後、熊本の高へ進学している。高では文学に興味をもち、校友会誌に紀行文などの随筆を発表している。歴史への関心は、沖縄の尋常中学校の先輩である真境名（号は笑古）からの影響であったようであり、

私が笑古君を知つたのは可なり古い。私が中学一年生の時に、彼は漢那、伊波、照屋等の諸君と共に五年生であつた。その頃学友会の雑誌に笑古君が毛氏由来伝を書いた事があつた。私等は子供心にもそれを愛読した。私が歴史を専攻するに至つた機縁はこの記事であつたかと思つてゐる。笑古君は謂はば私等の先輩であり、先達である³²⁾。

と記している。東恩納は歴史への関心をもち続け、東京帝国大学文科大学の史学科へと進学する。東恩納の進学時には、京都帝国大学には未だ史学科がなかった。そのため史学を志す学生は東京帝国大学文科大学史学科へ入学しなければならぬという状況にあった（京都帝国大学文科大学史学科が設立されたのは、東恩納が東京帝国大学を卒業する前年であった）。

大学在学中は、東京の尚家屋敷内の護得久御殿宅の書生となっている。東恩納は当時、尚家屋敷内の一角に本部を置いていた沖縄青年会（沖縄県出身の在京の学生会）の集会所におい

て、伊波や神山政良（1882-1978、東恩納の尋常中学の2年後輩で、当時、東京帝国大学法科大学に在学して、後に大蔵官僚となる。以下は神山）と語り合う機会が多かった。東恩納は、とくに伊波とは親密であったようであり、

伊波君とは一年ばかり共通の講義を聴いた事もあつて、合併教室の廊下でよく面が会つた。自分は文献の考証には、あまり興味を有たない、また得手でもないから、その方面は君で担当して呉れ、どの辺で切らう、大体薩摩入を境として分野を定めて置かうか、と伊波君が提案したのも、その廊下で、窓に倚りかかつての立晰であつた。真境名君の手許に相当史料が集まつてゐるから、詳しい年表を作らせようではないかとも云つてゐた。真境名君が、文献の渉獵に没頭してゐる間に、伊波君は、その豊かな推量を活かしてカンで行つた。（中略）

私はおもろを吾々民族の大きな文化遺産として尊重し、それを発見し解明して呉れた伊波君の功績を絶讃する者である。それにしても、おもろはどこまでも詩であつて、吾々の祖先の精神生活の記録であるとは考へてゐるが、それを生のまま史料として扱ふ事には躊躇する³³⁾。

と回顧している。伊波によれば、伊波自身は文献の考証には興味がないので、薩摩侵攻以降の文献考証を必要とする時代は東恩納が研究してはどうかと提案したようである。この話から東恩納は文献の考証を中心とする実証主義的な史学へと関心を向けていった。東恩納は、すでに『おもろさうし』（16～17世紀に王府によって編集された古謡集）研究に着手していた伊波から間接的な影響を受けた。しかし東恩納は実証主義的な史学の立場から、『おもろさうし』を史料としてはとらえていなかったので、伊波の研究も歴史的な実証性には問題があると考えていた。

伊波からの間接的な影響があつたとはいえ、学問的に、とくに学問的な方法において最も影響があつたのは、東京帝国大学文科大学での教授陣や講義であつた。当時の史学専攻は、主にドイツ史学の影響を受けていたが、実証主義がその中心にあつた。東恩納が学んだのは、江戸時代史研究の三上（国史学科の独立に尽力）、中世史研究の田中義成（1860-1919）、西洋史学の坪井九馬三^{くめぞう}（1859-1936）、古代史・古文書学の黒板勝美（1874-1946）、古代史研究の喜田貞吉（1871-1939）や荻野由之（1860-1924）、さらに東洋史研究の白鳥庫吉（1865-1942）、法制史研究の三浦周行（1871-1931）らであつた。これらの教授陣のなかで、とくに日本史研究者はドイツの実証主義史学を学んでいた。

この実証主義史学はお雇い外国人教師のリース（Ludwig Riess, 1861-1928）によつてもたらされたものであつた。リースは1887（明治20）年2月に東京帝国大学に赴任して、ランケ（Leopold von Ranke, 1795-1886）による史学をもたらした³⁴⁾。リースはベルリン大学でランケ

から学んでいるが、ランケはベルリン大学で演習（ゼミナール）を重視する教育法をとり、史料を方法的に分析し、それを経験的に解釈して判断するという方法をとっていた。一般的にこのようなランケの方法によって、実証主義に基づく科学的な歴史学が確立されたといわれる³⁵⁾。

ランケは史料の批判的吟味を厳密にするとともに、「個性」と「発展」に対する歴史的な感覚を深め、双方を結び付けることによって近代の学問としての歴史学を確立したといわれている³⁶⁾。ランケは啓蒙主義の教訓的で実用的な歴史観に対して批判的であり、普遍に対して目を閉ざしてはいないものの、あくまでも個別に即することを堅持している³⁷⁾。ランケにとって個別から普遍というのが歴史家のとるべき道であった。さらにランケは物質的・技術的な面における「進歩」は認めるものの、精神面での進歩は否定する。後世の人々が前代の人々よりも精神的に進歩することはありえないと考えている。したがって個々の時代がそれぞれ固有の価値をもっていることになるので、歴史を考察する意味があるという³⁸⁾。ここに進歩ではなく発展という見方が生まれる。しかしながらランケ自体の歴史像は限定的であり、その著書において大英帝国の拡大やアメリカ独立革命などには触れず、また資本主義社会や産業革命による産業社会の発達も扱っていない。この点でランケの歴史像は時代の流れを的確につかんでいたとはいえないが、その歴史学研究法については、ドイツだけでなく多くの国に影響を及ぼした。日本もリースを通じてその影響を受けた国のひとつであった。東恩納は日本人の教授陣を通じて、リースがもちこんだランケの史学に基づくドイツ実証主義史学の影響を受けた。

東恩納は大学教育の影響によって、生涯にわたって実証主義史学に基づく研究に邁進することになり、「疑はしきは語らず、また述べず」³⁹⁾という姿勢を貫いている。しかも歴史学という専門分野から外れることなく、この分野に終始した。しかも東恩納の歴史学は、その研究法を厳密にすることによって、自らの歴史像をつくっていくという展開をたどる。民俗学に対して関心をもち、その研究成果をとり入れることもあったが、根本的には歴史学に終始したといえる。この点では、自らの専門分野が言語学でありながら、言語学にとどまることなく、文学をはじめとして民俗学や歴史学などの幅広い分野で活動した伊波とは大きく異なっていた。

東恩納は前述のように、1908（明治41）年に「琉球方面より見たる島津氏の対琉政策」と題する卒業論文を提出して、東京帝国大学文科大学を卒業している。この卒業論文の課題は、伊波との会話でみられた時期的な区分にしたがったものであり、東恩納にとって、その後の研究の起点となるものであった。卒業論文は『島津氏の対琉球政策』⁴⁰⁾という稿本としてまとめられ、著書として刊行する意志があったものの、結局、出版されていない。

東恩納はこの稿本において、

従来、琉球政府の国是とするところは、日支両国を父母の国とし、絶対的に、穏便の手段を取りて、自家の運命を持続せんとするにありき。而して、琉球の如き貧小国が、世界の
大勢に反抗して、強いて其独立を貪らんが為めには、此姑息なる政策を措いて、最良の手

段は、実際に於いてあり得べからざりしなり。夫故に、中央政府の威権重く、巧に此の政策を操り、両大国との関係を、其形式に於ては兎に角、其実際に於いては、単に経済的に留まらしめば、或は其理想に近き小王国を樹立し得しなり。琉球史中、この両思想の巧に調和したる時代は、即ち王国として黄金時代にして、其衝突の時代は、即ち其王国的存立条件の大部分を失墜したる時代なり⁴¹⁾。

として、琉球王国が日支両国の狭間で、政治的な対立関係をもたらすことなく、実際的な経済関係を維持することが重要であったとしている。まさに向象賢や蔡温の時代は、こういったことが重視された時代であったという。

そしてこのような体制に大きな影響を及ぼしたのは、薩摩侵攻である。稿本では日支両属思想の形成過程、およびそれが琉球社会に及ぼした影響と実態が究明される。そして結論部分において、東恩納は、

島津氏の琉球に着目せる主眼は、支那貿易の利にあり。琉支交通は廃す可からず。琉支交通の楔子は、進貢、冊封の礼に有り。日琉の消息は漏すべからず。況んや病膏盲に入れる儒教の恩化は、王者の尊厳を妄想せしむるに於てをや。於是乎、外にありては抗す可からざる大勢の駆るところ、内にありては棄つべからざる因襲の促すところ、遂に彼れをして、両属てふ小策を案出するの止むを得ざるに至らしめぬ⁴²⁾。

という体制が築かれたという。東恩納はこの後、60年余りの研究生活を送ることになるが、生涯をかけて追い求めた研究課題が、すでにこの稿本（卒業論文）で現れている。すなわち日支両属という体制が、琉球社会にどのような影響を及ぼしたのかという課題であった。

この稿本（卒業論文）が、その後の琉球研究に対して重要性をもっているのは、研究内容だけではなく、その史料の多くが当時の内務省に移管されていた文書を利用したという研究方法にあった。東恩納は史料に関する状況について、

明治初年廃藩置県の際に首里政庁に保管の文書は悉く外務省に引上げられ、その後内務省に移管、大学在業中、史料編纂所を経て取り寄せ、大方は目を通し、必要な箇所は記録にも取つて内務省文書と題して今も手許にある。税制に関するものは、大蔵省にあり、之れも田中五郎主計局に在職中文書主任高畑氏に紹介して貰ひ、書庫に出入の許可を得て、これも大方は目を通して置いた。

然るに関東震災の時に、内務省文書は全部烏有に帰し、大蔵省文書も亦今次の戦災で、全部喪失した。沖縄図書館には、伊波・真境名・島袋の三代の努力で、多数の史料を蒐集してあり、郷土図書館としては、全国に出色のものであつたが、これも今次の戦災で亡逸

した。首里邸には、家々の家譜が保存され、最も貴重なる資料であつたが、これも亡んだ。今では私の文庫に蒐集のものが、琉球史料としては、最たるものであらう⁴³⁾。

と語る。島津氏の対琉球政策に関する史料の原本は、ほとんど失われてしまったが、東恩納の手写本という形によって、かろうじて史料が残った。したがって現在に至るまで、島津氏の対琉球政策に関連する研究は、東恩納の手写本に依存している。

東恩納の研究業績は、この卒業論文が最初というわけではない。東恩納は卒業前に、すでに研究論文を発表している⁴⁴⁾。1906（明治39）年には「為朝琉球渡来に就きて」（『歴史地理』、第8巻4号）という論文を発表し、『琉球新報』紙に「為朝事蹟考」（4月1～6日）と「伊波普猷君と於もろ」（8月7日）という小論も発表している。文科大学の在学中に、為朝に関する論文は計4編を発表し、その他にも「旧琉球の階級制度」⁴⁵⁾を『歴史地理』誌に発表して、計13編の論文を発表している。

源為朝（1139-1170？、以下は為朝）の渡来については、諸説がある⁴⁶⁾。たとえば、為朝が琉球に渡来して、その子が第一代の舜天になったというのは伝説にすぎないという意見と、政治的目的のために語られたという意見などがあつた。伝説にすぎないという意見の最初は、琉球史研究家の加藤三吾（1865-1939、以下は加藤）による著書『琉球の研究』⁴⁷⁾であつたが、東恩納は史料に基づけば、加藤の主張は肯定も否定もできないと反論した。東恩納は、残された史料の分析から、

為朝琉球入の伝説を唱へ出したのは向象賢でないと言ふ事を確め、同時に又薩摩の歓心を得んが為めに捏造した政策であるとの説は、遺憾なく其根拠を覆したものと信ずるのである⁴⁸⁾。

と語る。一方、政治的目的という意見に対しては、島津氏が源氏を祖としたので、その関心を引くために為朝の渡来が語られたとするのは誤りであるという。東恩納は為朝の渡来が『おもろさうし』で語られていたために琉球の伝承となり、為朝の渡来は琉球の知識人に親近感をもって受け入れられた結果であると解釈している⁴⁹⁾。まさに東恩納は為朝の渡来について、ドイツ実証主義史学の方法をそのまま適用し、史料を方法的に分析し、それを経験的に解釈して判断した結果を述べているのである。

東恩納が発表したのは論文だけでなく、著書となった論考もある。当初から著書にするつもりはなかつたようであるが、『琉球新報』紙に1908（明治41）年から翌年にかけて1年余り連載された「歴史瑣談」は、まとめられて『大日本地名辞書』続篇（第二 琉球）として刊行される。この『大日本地名辞書』続篇は、1900（明治33）年3月から1907（明治40）年10月にかけて刊行された吉田東伍『大日本地名辞書』の続篇として新たに刊行されたものであり、

北海道・樺太・琉球・台湾の部が収録され、そのうちの琉球の部が東恩納の著述であった⁵⁰⁾。為朝の伝承に関する論文が大学での学修の成果（ドイツ実証主義史学の適用）であったとすれば、『大日本地名辞書』続篇（第二 琉球）は、東恩納が自ら史料の蒐集や調査をするという研究活動の出発点であったといえる。

これらの業績の刊行が可能となった東恩納の研究は、史学科での勉学もさることながら、史料に恵まれ、多くの聞き取りも可能であったという研究環境にも依拠している。東恩納は大学在学中に九段の尚家の屋敷内にあった護得久御殿の書生をしていた。卒業後も数年間にわたって書生をしていたが、そこでは廃藩置県（琉球処分）⁵¹⁾前後の様子について、尚家の史料が豊富に所蔵され、また尚家の側近から聞き取るという貴重な機会に恵まれた。

もっとも東恩納の歴史学は、単に尚家を中心とする琉球の歴史をたどるというものではない。むしろ東恩納は尚家の史料所蔵に対して厳しい姿勢で臨んでいる。

尚家はその祖先の勲功によって王侯の栄位を保ち、国家の優遇を受けて来たが、その子孫は歴史的伝統に安坐するものであってそれだけの優遇に値するほどの功績のあったわけではない。尚家の資産及び文化的歴史的資財は廃置処分後、国の法規に従って、私財に分類登録されたものではあるにしても、元来それは王者の権力によって国民から搾取したものであり、歴史的背景によって集積されたものである。言を換えていえば、それらは公人としての尚王の所有であって、一私人としての尚某が私すべきものではない。

歴史は民族共有のものである。従ってその歴史を裏付ける文化遺材に対しては、民族全体が関心を有ち、民族全体の責任において保管さるべきものである。法規を楯に取って、それ等の遺材を、尚某一私人の生活運転に振向ける目的で、一存で処分してよいという性質のものではない。けれども、これは道義上の問題であって法律上の問題ではない⁵²⁾。

と語る。尚家は王家であるので、その史料の蓄積はぼう大なものがある。しかし、それは尚家の私有物ではなく、これまで琉球王国が蓄積してきたものである。この公のものである史料は、公が責任をもって保管しなければならない。東恩納は琉球の歴史を解明するためには、その史料保管が重要であることを訴えている。研究者として出発した東恩納は、このぼう大な史料を利用して、琉球の対外交渉史の開拓ならびに琉球の郷土史学の確立へと向かっていく。

4 沖縄史の実証的研究

東恩納は大学卒業後の1910（明治43）年に私立東京中学校の教諭となるが、翌11（明治44）年には私立高千穂中学校へと移っている。東恩納は高千穂中学校で約8年間を過ごすことになる。これらの私立学校の在職中に東恩納が着手した研究は、発表年代順に地名人名、琉球

歌謡、伯徳令、位階制、そして日琉関係に関する研究などであった⁵³⁾。各研究は大学在学中に発表した研究業績を、さらに進展させたものであった。

東恩納は研究のみでなく、教育にも力を入れている。沖縄の将来を担う人材の育成をめざして、上京した沖縄県出身の学生の面倒をみている。高千穂中学校へ移った翌年の1912（明治45）年に、東京小石川に沖縄県学生寮が設立され、「明正塾」（明治と大正にまたがっているという意味）と命名される（落成式は1913（大正2）年であった）。当時の沖縄県出身の学生の集まりは、「沖縄青年会」と称していたが、元々は1886（明治19）年の「勇進社」がその始まりであった。勇進社は翌87（明治20）年に沖縄学生会と名称を変更し、さらにその3年後の1890（明治23）年には沖縄青年会と改称して、前述のように尚家屋敷の一角に本部を置いて、そこを学生の集会所としていた。伊波が1906（明治39）年にこの青年会の会長に就任している。この青年会の伊波や東恩納などの要望に応える形で、沖縄県学生寮が設立されたのであった。

東恩納はこの明正塾の初代舎監となる。明正塾の建設費用は沖縄県からの補助金に大きく依存していたものの、明正塾の運営資金は塾卒業生からの寄付や、東恩納寛文（寛惇の長兄）による那覇での募金活動によって集められた募金などでまかなわれていた。寄付や募金で維持されるという状態であったために、入寮希望者が増加するにつれて、その運営が厳しくなる。そこで入寮希望者を断るという状況になる。とくに1923（大正12）年頃には、入寮希望者が收容できないという事態が発生する。そして入寮できなかった学生から、舎監の東恩納へ批判が出る。

東恩納は明正塾運営の責任をとるという形で、1923（大正12）年の関東大震災の直前に舎監を辞任する⁵⁴⁾。明正塾は東恩納の辞任後に管理規則を設け、その規則に基づいて管理委員会が運営を行なうことになった。管理委員会は7名で構成され、東恩納も委員のひとりとなり、その他は神山、漢那憲和（1877-1950、後に海軍軍人、衆議院議員）、伊江朝助（1881-1957、後に沖縄新報社長）、銘苅正太郎（1876-1952、後に医師）、仲宗根玄愷、上運天令儀であった⁵⁵⁾。この代表委員には神山がなり、それと同時に神山が舎監になった。

ところで東恩納は1919（大正8）年に高千穂中学校から東京府立第一中学校へ移っている（府立第一中学校は1929（昭和4）年に東京府立高等学校となるので、東恩納は高等学校の教授となる）。この府立第一中学校時代に、東恩納の代表的な研究業績が発表されている。それは三つあり、一つは『尚泰実侯録』（明光社、1924年）⁵⁶⁾、二つは『琉球人名考』（郷土研究社、1925年）⁵⁷⁾、三つは『維新前後の琉球』（弘道閣、1926年）⁵⁸⁾である。『尚泰実侯録』と『維新前後の琉球』はほぼ一体をなすものであり、実証主義史学に基づく文献研究に加えて、書生時代の聞き取りを加味しているという著書であった。『琉球人名考』は『大日本地名辞書』続篇（第二 琉球）の姉妹編であり、人名研究の集大成というべきものであった。

一つ目の『尚泰実侯録』は、琉球国最後の国王となった尚泰一代の事蹟について、実録の形

式をとって編纂著述した著書である。元々実録というのは、中国に始まった史体のひとつで、帝王一代の事蹟を編年体に記録したものである。中国では唐代にこの実録編纂の形式が確立したが、その後、実録類は中国の正史編纂の基礎となり、歴史研究の根本史料ともなった⁵⁹⁾。そしてこの実録編纂は中国の周辺諸国に波及した。琉球国の場合は、正史類の編纂はあったが、実録の編纂はそれまで皆無であった。したがって琉球史上における実録の編纂は、東恩納による『尚泰侯実録』が初めてであり、しかも唯一であった。編纂には1919（大正8）年から1922（大正11）年までの約4年間で費やされているが、国王尚泰の事蹟を生誕（1843年）から薨去（1901年）まで年月日を追って、いっさいの主観を入れることなく淡々と記録されている。この実録が取扱っている時期は、沖縄の帰属問題に関する政治外交上の展開がめまぐるしく動き、多事多難な時期であった。実録ではこの時代的背景をふまえて、王庁政局の動向や対応策が克明に記録されている。東恩納が沖縄の帰属問題を考察する場合の根本を形成しているといえる。

『尚泰侯実録』が国王尚泰の事蹟を淡々と記録しているのに対して、同時期のことを対象にした『維新前後の琉球』においては、明治維新に対する好意的な表現がみられる。東恩納は『維新前後の琉球』の結論において、

維新の大変動と云ふものは、一般士族に取つては非常に打撃であつたと共に、一般平民に取つては天来の福音であつたかと思はれます。（中略）

王政一新の政治は、結果に於て、多数平民の解放となつたのでありますから、内地諸藩に於ても右様の関係になつて居ります事は申すまでもありませぬが琉球に於ては、全然別種の事情から、同一の結果を齎して居るのでありまして、斯う云ふ点から観ましても、維新の大業は時の勢であつたと云ふ事がわかると思ひます⁶⁰⁾。

と語る。明治維新は平民の解放となつたので、「時の勢」であつたとされる。東恩納は記録に徹している『尚泰侯実録』とは異なり、実証主義史学によって明治維新に関する解釈を行なっている。

二つ目の『琉球人名考』は、柳田国男（1875-1962）が編集している『炉辺叢書』の一冊として執筆されたものであった⁶¹⁾。沖縄の人名については、大和の人間には理解し難いものが多いが、それはたとえ沖縄人であっても、すぐわかるというものでもなかった。それは歴史的な脈絡に関わっていたからである。沖縄の古代においては氏姓制がなく、人名にも姓と名の区別はなかった。沖縄で姓らしきものが記されるようになるのは、『歴代宝案』^{れきだいほうあん}（1424（永楽22）年から1867（同治6）年に至るまでの約450年間にわたる外交文書）によれば1425（洪熙元）年の上奏文に表された尚巴志からである⁶²⁾。尚姓は中国・明室から賜与されたものではなく、王室で使用したものを明室から認められたものであった（琉球の尚氏は代々「琉球国中山王」

に封じられた)。『中山世譜』⁶³⁾では王名は神号と童名(表向きの名以外で、家族あるいは親しい間柄で通用する呼称)⁶⁴⁾に分けて書かれ、神名は王の即位の時に、神女によってつけられ、童名は神名の中から選ばれたとされる。この童名が古琉球人の「名前」となり、その名前が琉球で定着したとされている。

また『明実録』(中国・明の史官が、皇帝一代の事績を記録した書物)によれば、使者や官生として派遣された者は、この童名が使われている。東恩納によれば、それは人名が沖縄の官職制度と密接に関係しているからであったという。このような童名の研究は『琉球人名考』が刊行されるまでは、ほとんど手が付けられていなかった。東恩納はこの研究の目的を、

古文献に見れた人名を、いかに訓むべきか、又後世のと、いかなる千繋を有するかを知るために、現今の人名より溯源する必要からであつて、名に関する土俗を知るのが当初の目的ではなかつた。それ故に、各種の童名の意義、それに関する習俗等に於て未だ尽さない処が尠くない。又神名・嶽名等当然手を着けねばならぬもので、全然抜かしたのものもある⁶⁵⁾。

と記している。研究の目的は現在の人名と古文献に現れた人名との関連を見出すためであり、人名の由来を探るのが目的ではなかつたという。著書では、できるだけ多くの童名を採集している。童名を解説するにあたって『冊封使録』に記述されていた天文・地理・時令・花木・鳥獸・身体・衣服・飲食などの関連する用語を参考にしている⁶⁶⁾。これは歴史学だけではなく、民俗学などの蓄積も必要とされる。東恩納は実証的な解明を試みているが、民俗学の成果も柔軟に取り入れる必要性を認めている。

5 沖縄史への視点

東恩納の研究対象は徐々に移っているように見えるものの、研究方法は実証主義史学が貫かれ、それと同様に沖縄史あるいは琉球史に対する考え方も一貫している。この考え方の根本は、1933(昭和8)年の沖縄県教育会での「本県郷土史の取扱に就いて」⁶⁷⁾と題する講演にみられる。この講演において東恩納は、国史と日本史は異なるとして、「国史というものは単に時代の変遷を知らしめるのみでない」と語り、

然しながら郷土史は、国史の一部分であつて、従つてその教授によつて、期する所の目的及結果は、全体のそれと抵触してはならない筈である。(中略)まづ沖縄の歴史が他の地方史と甚だ違つてゐる処は、支那との関係である。支那との関係^マは足利の初め頃から起つて、永い間その冊封を受け独立王国の姿を取つてゐた。此のことが、思想の上にも大分影響があり、又日本国民としても異つた眼で色づけられてゐたものである。

沖縄が支那と交通を開いたのは、主として、経済的關係に本をなしてゐる。早い話が支那と品物の交換等が盛んに行はれてゐる⁶⁸⁾。

と語る。東恩納は東京帝国大学で学んだ他の学生と同様、強い国家意識をもっていたと考えられるが、それは日本というのではなく、沖縄という郷土へと反映された。そしてこの郷土意識に支えられて、東恩納は沖縄が成り立ってきた大きな要因は中国との交易であるとして、その交易史を解明することが重要であるという⁶⁹⁾。

東恩納の著書『琉球の歴史』(至文堂、1957年)は、この強い郷土意識に裏打ちされたものであり、さらに中国との交渉史や交易史を意識した歴史概説書であった⁷⁰⁾。この著書は琉球国王の在位に基づいて分類されているが、もちろん実証主義的な研究に立っていたことはいうまでもなく、しかも単に史料を並べて解説しただけのものではない。著書の構成は、開闢伝説に始まり、戦後のアメリカによる土地接収の問題で終わっている。戦中の部分は、淡々と事実が説明されているだけであるが、「琉球の最後」や「日本敗戦のしわよせ琉球、宿命の二十九度線」⁷¹⁾という項目があり、沖縄が戦争によって大きな被害を蒙ったことを強調している。

東恩納は強烈な郷土意識に基づいて、沖縄県民を鼓舞するかのようになり、以下のように訴えている。いささか長い引用になるが、東恩納が歴史を語る場合の姿勢あるいは視点が、端的に表現されているので引用する。東恩納は、

十七世紀以後の沖縄人は薩摩の征伐を受けて国民的自覚を失つた。海の王者としての自尊心を失つた。強者の鼻息を窺ふ憐れむべき地位に到つた。強者の制服の手が常に悪夢の如く暗雲の如く彼等の自信力を迫害してゐた。それが三百年も続いた。其の為に彼等は非常に憶病な姑息な奴隷根性を有するやうになつた。

病已に膏盲に入るとでも申さうか。

幕末の政治的大変動は此の压制者を追ひのけた。而して其の宿痾に向つて大手術を試みた。琉球の廃藩置県とは其の大手術を云ふのである。頗る面倒であつた。政府にも随分御迷惑を掛けて済まなかつた。併し待てよ、其の為に海の沖縄人を頑迷等と非難するならばコチラにも文句はある。頑迷には誰れがした。

手術は幸にして効を奏した。事後の経過も甚だ良好であつた。さしもの宿痾も全治した臆病な因循姑息な沖縄人は遂に十五六世紀の昔にかへつて海の沖縄人としての真面目を發揮し初めた。其の覚醒したる自覚したる海の沖縄人の先駆は親愛なる海外の諸君よ、実に諸兄である。

諸君、吾人の祖先は、吾は琉球人なりと世界に誇つた。大なる信念と自覚とを以て世界の表に闊歩した。微塵も弱音を吐かなかつた。屈托しなかつた。到る所に方法を見出した。充実したる元氣と断々乎たる大信念とを以て常に自家の事業を讚美し祝福し謳歌した。

諸君よ、諸君は寔に海の沖繩人の再現である。願くば単に其の事業に於てのみならず其の精神に於ても潑刺たる吾人の祖先に学べ。熱情あれ。犠牲の大精神を養へ。諸兄、自ら諸兄の事業を讚美し祝福し謳歌せよ、而して世界の表面に立つて十分なる自尊と確信とを以て大声言へ「海の沖繩人吾れ」と⁷²⁾。

と訴える。海の沖繩人は薩摩侵攻以来、誇りを失い奴隷根性をもつようになった。この奴隷根性に対して、明治維新ないし廃藩置県（琉球処分）は大手術であったとみなす。これによって海の沖繩人として、再び活動をするようになったという⁷³⁾。東恩納は祖先に学んで、学んだことを積極的に実現しようと訴えている。このように琉球人の海洋発展の理想を述べ、その気迫を称揚したのは、近代沖繩では東恩納が最初であった。

以上のことから、東恩納の琉球史に関する視点には、大きな特徴が三つあったといえる⁷⁴⁾。一つは沖繩史が国史の一部であるという認識をもち続けている点である。この認識に立って、沖繩の特徴である中国交流史を追求している。二つは日支両属という思想を打破しようとつとめている点である。この日支両属の思想を論破する目的で執筆されたのが、『概説 沖繩史』⁷⁵⁾と『沖繩涉外史』⁷⁶⁾であった。これらの著書はいずれも戦後、沖繩県の消滅にともない、沖繩の認識を深めるために外務省で開催された研究会での講演を元にしたものである（後述）。この二つの著書に基づいて著書『琉球の歴史』が執筆された。『概説 沖繩史』と『沖繩涉外史』では、琉球と中国との関係は、琉球にとってはあくまでも経済上の問題でしかなかった点や、両属という用語は『喜安日記』が初出であり、それ以前にはなかったということを指摘している⁷⁷⁾。三つは郷土史の研究は、単なる科学ではないことを示している。東恩納は、郷土に愛着をもつことなく、郷土史を扱うことはできないという⁷⁸⁾。東恩納は、沖繩に対する啓蒙ということで、

沖繩の一切の文化が日本文化全体から見て重要な地位にある事を自覚させるより大切な事はないと思はれます。吾々が生涯を賭して郷土文化の闡明に没頭してゐるのもその為めに外なりませぬ⁷⁹⁾。

と語る。東恩納の歴史学は強烈的な郷土意識に支えられていた。

6 歴史学の構築

東恩納は文献実証主義の立場に終始した。可能な限りの文献記録類を蒐集し、それを基礎とする実証主義的な研究に徹底した。これに対して伊波は、民俗学あるいは社会学的方法も駆使して、多くの伝承史料にも依拠しながら研究にあたっている。東恩納と伊波の研究方法は、た

たとえば史料の乏しい古代史などでは大きく異なる。東恩納はわずかの残存文献を最大限に駆使し、多面的な考察によって史論を展開することになるが、伊波は多くの伝承史料と豊かな推量を活かして、古代社会やその信仰形態などを明らかにしている⁸⁰⁾。したがって伊波が着手した『おもろさうし』研究については、東恩納はその文化遺産としての価値を十分に認めつつも、それを史実とみなすことに対しては慎重であった。

一方、古代史とは異なり、史料が比較的豊富な中世・近世以後の分野においては、伊波は限られた郷土史料にその論拠を求めた。これに対して東恩納は郷土史料のみでなく、国史史料や中国史籍、さらに朝鮮やその他のアジア地域の史料や家譜を収集して、古文書や金石文、漢籍類を解説して、これらを論拠として史論を展開している。東恩納は郷土史を解明するにあたって、郷土史料だけに固執するのではなく、ひろくアジアとの関連を視野に入れながら、自らの論を展開している。

東恩納は、戦後の1957（昭和32）年に自ら携わった沖縄の歴史研究について、

私が郷土史の研究に手を染めてから、かなりの年月を重ね、成るに従って逐次発表もして来たが、細部において、自らあきたらない点が少なくない。いずれの研究部門でも、そうであろうが、さの疑点もなしに、十分満足の行く境地に達するという事は、なかなか出来がたいことである。それをわからぬなりにまとめあげることは、私には出来ない。われわれの研究は、このような細部の疑点を解明することに、精力の大部分を傾注したために、今以て訓詁の域を脱し切れずにいる。詳説沖縄史の筆を執るだけの勇気もなければ、興味も実はない。今の間に、不明な点を徹底的に釈明しておかねば、だんだん癒着して、手のつけようがなくなるであろうと懸念されるところから、完全なものにまとめあげるのは、後進の人に託し、われわれ自身は、その資料をそろえることに、全力をそそいでいるわけである⁸¹⁾。

と語っている。東恩納の歴史学では史料の徹底的な解明が最も重視され、その姿勢が貫かれている。東恩納の論理の明確性は、このような姿勢に裏付けられたものであった。

しかし東恩納の歴史学は、このような特徴をもっていたために、限界のある分野もある。たとえば文献史料に依拠する実証主義という方法的な制約から、文献史料に乏しい「古琉球史」や「女性史」への貢献が弱くなったことは否定できない。この点は、真境名との共著で『沖縄女性史』を残した伊波との違いである。これはおそらく伊波と東恩納の問題関心の違いというだけでなく、東恩納が重視する実証主義という方法的にも大きく関わっていた。また文献史料の制約という点で、「地割制」（琉球王国独自の土地制度であり、基本的に村の構成員間で耕地の割替を行なう土地共有制度）に関する論考についても同様のことがいえる。東恩納による地割制の研究は、1947（昭和22）年に刊行された柳田国男編『沖縄文化叢書』（中央公論

社)のなかに収録されているものの、戦後の史学界で農村経済史研究が大きな潮流となっていたことから考えて、東恩納の業績数があまりにも少ない⁸²⁾。おそらく東恩納の場合、地割制に関する文献史料の制約が、業績の少なさとなったと考えられる。

この地割制の研究に比して、沖縄史に関して東恩納の研究業績が多く残っている分野があるが、その多くがアジアとの交流史である。前述のように東恩納は沖縄の歴史を解明する上で、アジアとの関係は避けて通れないものであり、むしろこの視点から沖縄史を考えていくことが重要であると考えている。前述の中世・近世以後の分野においてみられたように、東恩納の歴史学は単に実証主義に徹するというだけではない。東恩納の沖縄史研究は、東(南)アジア全域にわたる広い視野から地名・人名・言語・芸能などに及ぶ独創的な研究へと向かっている⁸³⁾。この研究が先駆的であるのは、前述のように1933(昭和8)年に中華民国・安南・シャム・ビルマ・インドなどの東南アジア諸国において「隋唐以後の日中関係」調査のために、約1年間にわたって旅行を経験したことがきっかけとなったと考えられるからである。

東恩納がこの調査に携わった当時は、日本は海外との交流を進めてアジアという広い視野で考えるという風潮にはなかった。むしろ出発の3年前には満洲事変が勃発し、2年前には上海事変、満洲国の承認、出発年には国際連盟からの脱退があり、日本が戦争にのめり込んでいく一方で、中国では排日運動が起こっていた時期であった。日本ではアジアの一体化を強調する「大東亜共栄圏」が宣伝されたものの、それは戦争遂行のための政治スローガンにすぎないものであった。東恩納の調査は、もちろんこのスローガンにしたがったものではなく、アジアと沖縄との関係を解明するという目的をもった研究であった⁸⁴⁾。

東恩納が訪れた地域では、日本町が栄えていたということで、日本の南方発展の先駆としてとらえ、各地域を訪ねて、その地域の沿革、風俗習慣、宗教、華僑や日本人の活動など、政治、経済、文化にわたって観察や記録を行なっている。この研究成果は1941(昭和16)年に刊行された『黎明期の海外交通史』(帝国教育会出版部)⁸⁵⁾となる。主に調査対象となった地域は、れきだいほうあん『歴代宝案』⁸⁶⁾で取り上げられている地域であり、その中にみられる交易品の不明な点、あるいは琉球文化のなかに存在するものの、その源流を探るといった点が考察対象となっている。

『歴代宝案』は17世紀に琉球王府の修史事業の一環として編纂された文書である。この文書作成を担ったのは、14世紀後半に中国・福建から沖縄に移住してきた一団に始まる中国系住民の居留地「くみんた久米村」の人々であった⁸⁷⁾。この人々は琉球王国の外交や交易の通訳、実務文書の作成を担っていた。『歴代宝案』は琉球王府が保管していたが、廃藩置県後に明治政府によって内務省へ移された。しかしこの文書は関東大震災で焼失してしまうが、もう一組の文書が久米村に保管されていることが1933(昭和8)年に判明する。さらにこの久米村に保管されていた文書も、太平洋戦争の沖縄戦によって散逸するものの、それ以前の1936(昭和11)年に、歴史学者の小葉田淳(1905-2001)らが在籍していた台北帝国大学によって写本がつけられていた⁸⁸⁾。琉球王国の外交について解明が進んだのは、この写本に依るところが大きい。

東恩納の著書『黎明期の海外交通史』では、主に中国と朝鮮との交通貿易史が取り上げられている。琉球の交通貿易は対中国関係を中心に発展しているので、交通貿易史という視点からは中国関係が主に取り上げられてもよいと考えられるが、東恩納の著書では、中国との交通貿易については、わずかに12ページほどが割かれているにすぎない。東恩納も、

これを交通史と称するには、或は体裁不備の点があるかも知れない。けれども黎明期の三字は幾分これを辯疏したつもりである。夫の朝暎天に冲せんとして、紫閃微茫の裡に躍動するに譬へよう。この時に当つて、万象なほ模糊として全貌を認め難きものがある。やがて旭日瞳々天の一角に顕現する時、明々白々の形体悉くその統制を具象し来るのである⁸⁹⁾。

と記している。つまり琉球の交通（交渉）史を考える場合、中国との関係だけでは不十分であり、さらに地域的な広がりをもって研究していくことが必要であるという。実際に琉球の交通（交渉）史ではアジア全域にわたる広がりをもっていたといえる。そして交通貿易史という点から、貿易品、これを動かす組織と人間などについて、さらに研究を推進していく必要性を説いている⁹⁰⁾。東恩納自身が語るように、交通史研究は未だ不十分な段階にあるが、沖縄の位置付けを考える場合に、この研究を将来的に発展させていくことが重要であるという。東恩納によれば、歴史研究は単に過去の事績を実証的に解き明かすだけのものではなく、未来志向的なものでなければならない。

海外交渉史は琉球の生活文化と深く結びついていた。とくに甘藷や砂糖などは食生活に関わると同時に、産業にも大きく関わっていたので、東恩納は海外との交渉史の研究で甘藷や砂糖などにも関心をもった。甘藷は中国大陸から伝わり、琉球が媒介となって江戸後期の日本社会に大きな影響を及ぼした。東恩納は多くの論考で、このような展開をもった甘藷史に言及しているが、そのなかで代表的な論考は『沖縄タイムス』紙に連載された「芋の話」（1955年7月1日～5日）⁹¹⁾であった。沖縄と中国大陸との文化史的関係に関する研究は、1965（昭和40）年においてさえも、それほど多くないことから、東恩納の研究は先駆的なものであったといえる⁹²⁾。

さらに日本や東アジアの歴史展開における琉球史の位置付けという問題意識で行なわれた『六諭衍義』の研究は、東恩納の研究活動では見逃すことができない重要なものである⁹³⁾。その成果は1943（昭和18）年に『六諭衍義伝』⁹⁴⁾として刊行される。「六諭」とは1388（洪武21）年に中国・明の太祖が民衆教化の目的で宣布した六か条の教訓のことである。東恩納が『六諭衍義』に関心をもったのは、これが琉球の程順則（1663～1734、名護親方寵文、以下は順則）と密接な関係をもっていたからである。渡唐した順則は『六諭衍義』を教化の書としてだけでなく、官話の正音を教えるのに好適であると考え、『六諭衍義』を琉球へもち帰った。これによって琉球史研究において『六諭衍義』は重要な研究対象となっていた⁹⁵⁾。

しかし東恩納が注目したのは、これだけではない。『六論衍義』は江戸後期の日本文化にも大きな影響を与えたということにも注目している。1719（享保4）年に八代将軍吉宗は『六論衍義』が献上されたことをきっかけにして、庶民教化のねらいで、その訓読にあたらせている。その後『六論衍義』は教訓書として浸透していった。その浸透の程度については定かでないが、東恩納は『六論衍義』を「享保初年から明治末年に至るまで、約二百年間、我が国庶民教科書として、忠孝朴実の風教を資けて来た書物である」⁹⁶⁾として、長年にわたって広範囲に普及した書物であり、庶民教化にとって大きな役割を果たした書物と位置付けている。したがって琉球史の日本史における位置付けを模索している東恩納にとって、『六論衍義』は格好の研究対象となった。『六論衍義』の流布が広範囲にわたっていること、さらに琉球の特徴である両属政策とも切り離せない存在であることで関心をもったという⁹⁷⁾。

7 沖縄史学の基礎

戦後になって東恩納の歴史学が見直されたので、東恩納の沖縄史学は戦後の沖縄について考えるきっかけを与えている。それは戦後に外務省内で開催された秘密裡の研究会という場が出発点となった。1948（昭和23）年に日本政府は閣議で「沖縄関係残務整理要綱」を決定し、それによって沖縄県関係の行政機構が廃止され、沖縄県は消滅した。そこで政府部内において沖縄への関心を高め、その認識を深めるために、外務省で沖縄に関する研究会が開催されることになる。

この研究会の講師として東恩納が招かれ、前述のように「概説 沖縄史」と「沖縄涉外史」をテーマにして講義を行なっている。「概説 沖縄史」に関する研究会は1949（昭和24）年に計7回にわたって開催された。その最後の講義で、東恩納は沖縄の惨状に思いをはせて、

蕞爾たるこの海邦、常に平和に恋々として一切の武備を捨て、民生を豊かにし、天地の化育に参して地上の楽土を実現せんと努力しつづけて来たにも拘らず、周囲の激浪は絶えずその生活を脅威し、搾取し、竟にはこれを抹消せんとするに至った。若し人類の文明にその會つての過失を追想し反省する日が来るとしたら、その時こそ是等の島々の生活が、理念が、文化が、深き同情と愛着とを以て追念されねばならないであろう⁹⁸⁾。

と語っている。周囲の環境によって翻弄されてきた郷里沖縄に対する東恩納の思いが込められている。人類の文明に反省が迫られるときが来れば、必ず沖縄の生活や文化を見直さなければならないとまで述べている。

東恩納は郷里沖縄が焦土と化し、史跡・名勝・文献などが灰燼に帰したために、その文化遺産を継承したいと願っていたようである⁹⁹⁾。1950（昭和25）年に刊行された著書『南島風土

記』（沖縄郷土文化研究会）では、その思いが強く出ている。東恩納は、

実のところ自分は、是等の島々の過去の生活を精確に印象するつもりで考証して来たのであつたが、その生活が悉く御破算になつたのであるから、力も抜けようではないか。けれども時代がどんなに変らうと、一千年の史実を抹消する事は出来ない。それは實在であつたからである。その抹消する事の出来ない實在をありのままに記録するのが、この書の目途であつた。それが、新しき世代に何程の役に立つものであるかは、自分の知る限りではない¹⁰⁰⁾。

と語る。東恩納は『南島風土記』において関係する史料を縦横に駆使した。実証主義史学を展開してきた東恩納の真骨頂が発揮されたといえる。史料の豊富さと記述の正確さという点で、『南島風土記』は近代の風土記としては出色のものである。その記述内容は、いみじくも東恩納が新世代に役立つかどうかかわからないと述べているように、ある種の意図をもって書かれたものではない。まさにこの点で戦後の沖縄史研究の出発点といえるものである。

『南島風土記』では至る所で、伊波による地名の解釈を批判した箇所がある。たとえば今帰仁（なきじん）の地名の由来をめぐって、伊波は言語学だけでなく民俗学や歴史学を駆使して、時として想像力に支えられて、その解釈を行なっている。東恩納はそれを批判して、あくまでも実証主義史学に徹して、ぼう大な史料によって史実の正確さを期すように努める。伊波は文学的要素がややもすると強く出る場合があるが、東恩納はあくまでも実証主義的な記述に徹している¹⁰¹⁾。

「沖縄涉外史」は1950（昭和25）年に計4回にわたって開催された。この研究会は、沖縄に関する認識だけでなく、その後の対中国観に関しても影響を与えた。東恩納は、

涉外関係と申しても、日支両国との問題が大宗で、南洋西洋等との問題はそれから分岐したものに過ぎませぬから、その根本を取つてそれからその枝葉に論及するのが便利かと思ひます。それについては明治初年日支両国主張の要旨を挙げ、それを一括し時代順に配列して批判しつつ話を進めて行く方が最も適切な方法かと思ひます¹⁰²⁾。

と語って、中国との交流史を中心に話を進める。最後に薩摩侵攻、明治維新による琉球処分、太平洋戦争の沖縄戦などに言及し、

人類の歴史は、ここに弱いものの活きるための苦しみを、沖縄の涉外史に発見し、文明の名に於て深き反省を要求されねばならないであります¹⁰³⁾。

と結んでいる。東恩納による「概説 沖縄史」と「沖縄渉外史」は後に著書として刊行され、戦後沖縄の展開や日本政府の外交に対して大きな影響を与えた。東恩納の歴史学が、戦後の沖縄問題を考える場合の基本認識となっていた。

8 結びにかえて——歴史学の課題

沖縄の歴史学をめぐっては、1928（昭和3）年の南島研究会の設立、1931（昭和6）年の郷土研究座談会の設立に続き、1932（昭和7）年に『おもろさうし』の研究会が設立されている。この『おもろさうし』研究会が、「新おもろ学派」の発足であったといわれる。この研究会は島袋の自宅で毎週1回夜に開催され、長期間にわたって続いた¹⁰⁴。この研究会は沖縄の地元において、学術的な郷土研究を継続的に組織した点で特筆される。さらに伊波、東恩納、真境名という沖縄研究の先達を研究会に加えることなく、島袋をはじめとする新世代の研究者が主体的に組織した点でも注目される。しかしこれは同時に、『おもろさうし』研究に対する先人と新世代の違いを浮き彫りにすることになった。

そのなかでも研究に対する姿勢や方法に違いがみられた。島袋は「オモロ研究の曙は来た」と明言し、伊波の「発音法」と、研究会の「展読法」の発見をあげる。島袋は伊波に対して、

（伊波が）オモロの各章に細字でかかれた前書きを、近頃曲名として認められるようになったことは、失礼ながら私達の見解と一致された雅量をお喜び申し上げる¹⁰⁵。

と批判する。この島袋による伊波への批判に対して、即座に反応したのは、当の伊波ではなく東恩納であった。東恩納は、

私は決して新人諸君の態度を斯く批評しやうとは思はない。ただ今少し謙譲な態度を以て是のおもろ学創置者の偉大なる学徳に対されん事を切望に耐へない。これ実に学徒の徳義であるからである¹⁰⁶。

と新世代の研究者の態度を非難する。東恩納は学問内容はともかくとして、新世代の研究の姿勢や方法に問題があるとする。この東恩納の批判に対して、島袋は伊波による『おもろさうし』研究の業績に対して敬意を表しながらも、

人或ひは、おもろ研究は限られた先達の領分で、濫りに後人の踏入るべからざる聖域であるとなさん、例へばわが国の古事記や万葉集などに縄張があろうか。さういふ誤解こそ、先人に対する冒瀆であり、祖先崇拜の赤心なき輩である¹⁰⁷。

と反論する。島袋には研究分野が先人による領分のようにみなされていることに対する憤りがあった。

島袋をはじめとする新おもろ学派は、「絶対的ともみえる“権威”に刃向かおうとの気構えが、彼らの口調を過度に挑戦的とした」¹⁰⁸⁾とされるが、伊波のなかでは批判に対する「反射的な憤り」と同時に、「故郷の後進」から批判を受けたことによる落胆があったようである。『おもろさうし』の研究会が発足した頃の伊波は、

笑古兄、この稿は、「つきしろ」の民俗学的研究から出発して、オモロの疑義を解き、序に琉球の中世史を垣間見た、今年最終の小収穫ですが、私のオモロ研究法的一端は、此中にほのめかした積りです。兎に角、私の研究も、どうやら目鼻がついたやうな気がします。東恩納君の言葉を拝借して言ふと、私の三十年の努力は、「漸く泥と破片とを選び分け、目にも止まらぬやうな破片をつぎ合はせて、漸く全形の予想がついたと云ふ所まで進んで来た」やうです。今暫らくはこんなやゝこしい仕事を続けなければなりません。だが、かういふ研究は、なるべく早く片付けてもつとすっかりした研究に指を染めたいのが、私の朝夕の念願です¹⁰⁹⁾。

と語っているように、伊波自身も確固とした学問体系を築くべきか、あるいは関心のおもむくままに研究を続けていくべきかを悩んでいたようであった。伊波は、東恩納がめざした方向と新世代がめざした方向との間を揺れ動いていたと考えられなくもない。

結局、研究の姿勢や方法をめぐる先人と新世代との違いは、前述のように東京で沖縄研究をする先人と、沖縄の地元で研究をする新世代との違いに由来する。これはいいかえれば、学問至上主義を通そうとする先人と、目の前の沖縄問題を考察するにあたって、その拠り所を求めようとする新世代の違いであったともいえる。

これを典型的に示しているのが、伊波に対する新おもろ学派の批判について、東恩納が「新学派の断定は一面には学者間の礼儀をしらぬものである」と批判していたのに対して、先人でありながら沖縄在住であった真境名が「この学派に多くを期待している」¹¹⁰⁾と、新世代の研究について肯定的に語っていることである。しかしながら、そうであるからといって、東恩納をはじめとする先人も、島袋をはじめとする新世代も、まったく異なる方向をめざしていたわけではなかった。いずれも、現実の沖縄問題に対して何らかの解決の糸口を見出そうとするものであり、将来像を模索しようとするものであった。この点で、歴史を対象にしながら、いずれも現実問題への対応に接近するものであり、またその一方で未来志向的であったともいえる。

東恩納は実証主義史学に甘んじているわけではない。1936（昭和11）年に『童景集』（新星堂）¹¹¹⁾という著書を刊行している。東恩納自身は、この著書を「雑文を集めた」と語っているが、この随筆や雑文は、学問という論理的な身構えをぬきにしているのも、むしろそこに

東恩納の人間性が垣間みえる¹¹²⁾。東恩納はこの著書において、歴史がすくい上げる抽象的記述では表現できない、生きた描写をしている。東恩納の歴史学における未来志向という場合、実証主義史学の方法論は、東恩納の意思にかかわらず継承されるが、むしろこの生きた描写こそが、東恩納が後世に伝えたいと願うことであった。生きた描写こそが未来志向性を秘めているといえる。東恩納は無意識的であったのかもしれないが、厳密な実証主義史学というよりも、人間性を訴えることによって、郷土意識が高まることを期待した。「過去は未来への照明であるならば、明治大正の文明史と謂いつべき『童景集』は新興沖縄の照明であろう」¹¹³⁾という。

戦後、東恩納は1958(昭和33)年に『沖縄今昔』(財団法人南方同胞援護会)という著書を刊行しているが、そのなかで「今昔とは言っても今をいわんが為の昔なのである」と語り、先人たちの事績を振り返っている。東恩納は、当時のアメリカ軍政下におかれている沖縄の状況をみて、

私はよく考える事であるが、問題の諸先人が今日生きていたら、どんな事をしたであろうかという事である。私は思う、諸君は恐らく全部親米派になっていたであろう。それは諸君が進歩的であったばかりか、太田天南の如き、此際アメリカの資本を導入する事が出来たらと現にもらしていたほどだからである。それにも拘らず、私が今日の指導者等と格段の相違ありと考える所以は、彼等が最後の旧人として古い文化に豊かな理解を有ち、それを保存し育成する事に努め、また農村の振興に畢生の努力を傾けていたからで、謝花氏が最初の農学士となり、県庁の一技官として奈良原知事に楯突き、太田、仲吉、諸見里の諸君が糖業政策に一家言を有していたのもこの為めであった。

それ故に彼等諸人は、飽くまでも沖縄及び沖縄の民衆の福祉を第一目標とし、その幸福をもち立てるための資金導入であって、アメリカの資金でビルが建ち、橋梁が出来、自動車走る事は、彼等も大歓迎したにちがいない。けれども真玉橋を潰し、玉陵を廃墟のままにさらし、首里城の正殿に学校を建て、中城殿を撤去して貸家を立てる事に対し、悲憤したに相違ない。況んや農民を追い立てて軍営を築造する事に対し、彼等ならば身を挺して抗争したにちがいない¹¹⁴⁾。

と語る。東恩納は、謝花昇(1865-1908)、仲吉朝助(1867-1926)、太田朝敷(1865-1938、天南は筆名)、諸見里朝鴻(生没年不詳、『琉球新報』紙の記者)らの先人をあげ、彼らは古い文化に対する理解をもつとともに、生活福祉の向上を願ったであろうと述べている¹¹⁵⁾。

東恩納は戦後に「自分は最後の沖縄人を以て自ら任ずる者である」と語ったといわれる。これは実証主義に徹した歴史研究者が残した未来への警鐘であった¹¹⁶⁾。戦前の多くの沖縄研究者の姿勢には、沖縄県民の差別的状況からくる地域的劣等感を克服したいという願望が働いていた。その一方で戦後の多くの沖縄研究者は、日本史のなかで沖縄という一地域をどのように

位置付けるのかという問題意識をもち、さらに戦後の復帰運動のなかで起こった「沖縄をどのように教えるのか」という実践的な課題を担っていた¹¹⁷⁾。この点で戦前と戦後の研究者の問題意識は根本的に異なる。東恩納は戦前を代表する研究者であるとともに、戦前と戦後の橋渡しの役割を担った。東恩納のいう最後の沖縄人とは、戦前の問題意識をふまえたものであったが、東恩納の問題意識は、そのまま戦後へと継承された。

東恩納という歴史学者が戦後の沖縄に求めたものは、何であろうか。東恩納による「わが目で見た沖縄」(『琉球新報』, 1959年1月18日～3月17日), 「成長した沖縄」(『琉球新報』, 1959年2月22日～24日), 「この目で見た沖縄」(『沖縄タイムス』, 1959年2月22日～3月1日) という一連の随筆によると、沖縄の人々に精神的な自立を求めていることがわかる¹¹⁸⁾。沖縄に対する認識なくしては、沖縄の復興はなく、沖縄の生活を救うこともできない。復帰運動の歴史のなかで、為政者を批判し、為政者に立ち向かう論説は数多くみられるが、東恩納のように住民の姿勢を問う論説はあまりみられなかった。

東恩納は晩年に自分自身の目で郷里をみることによって変わったと語る。ジャーナリズムによる間接的な情報だけで判断していることは、直接体験してみると誤りであることがわかったという。東恩納の認識の変化とは単純であり、事実を「正しくみる」ことによって、考え方が変わったということである¹¹⁹⁾。東恩納の実証とは、この事実を正しくみることであるが、沖縄に対する認識はジャーナリストの雑音によって惑わされる場合が多いと指摘する。しかしながらこれは東恩納の当時のみでなく、今日でも陥りやすい沖縄の問題である。

東恩納による沖縄の認識をみた場合、これまでの日本人の歴史に対する自己認識は、あまりにも通時的であって、共時的なものへの追究が不足していることがわかる。これは空間的把握力が弱かったということである。この欠陥は日本列島社会を、その意識空間の構造において分析することがなかったことにつながる¹²⁰⁾。この点で東恩納の歴史学は、これまでの日本の歴史認識とは異なり、むしろ空間的把握力に、その特徴がみられたといってもよい。東恩納は沖縄史を解明する場合、薩摩をはじめとする日本との関係、明や清という中国との関係、さらにひろく東南アジアとの関係を重視している。この姿勢を通じて、東恩納による沖縄の認識は、日本の認識、さらにアジアの認識へとつながっていく。東恩納の沖縄の認識は、日本だけでなく、アジアの理解へと通ずるものであったといえる¹²¹⁾。

注

- 1) 琉球の文字が定まったのは、1383(洪武16)年の察度王に下賜した鍍金銀印であった。このときの琉球は、大琉球と小琉球に分けられ、大琉球は沖縄のこと、小琉球は台湾のことであった。大小は島の大きさではなく、中国からみた経済開発や交流の程度に基づく表現であった。高良倉吉『アジアのなかの琉球王国』, 吉川弘文館, 1998年, 18～9ページ; チャールズ・S・レブンウォース著/山口栄鉄・新川右好訳『琉球の島々一九〇五年』, 沖縄タイムス社, 2005年, 16～9ページ。
- 2) 拙稿「伊波普猷と「沖縄学」の形成——個性と同化をめぐる」(『京都産業大学論集人文科学系

- 列』, 第 42 号, 2010 年, 1~34 ページ)。
- 3) 真栄平房昭「東恩納寛惇 (1882-1963) [「大交易時代」の構想者]」(藤原良雄編『別冊『環』⑥ 琉球文化圏とは何か』, 藤原書店, 2003 年, 290~1 ページ); 屋嘉比取『〈近代沖縄〉の知識人——島袋全発の軌跡』, 吉川弘文館, 2010 年, 2~6 ページ。屋嘉比取の著書によれば, 東恩納は伊波や真境名とともに沖縄学第一世代に位置付けられる。
 - 4) 渡口真清「解題」(琉球新報社編『東恩納寛惇全集』第 9 巻, 第一書房, 1981 年, 1 ページ)。『東恩納寛惇全集』は, 以下では『全集』と略す(編者と出版社も略す)。
 - 5) 喜舎場一隆「東恩納寛惇」(沖縄県編『沖縄県史 別巻 沖縄近代史辞典』, 沖縄県, 1977 年, 468~9 ページ); 島尻地区小学校社会科研究会『沖縄歴史人名事典』, 沖縄文化社, 1996 年, 65 ページ。
 - 6) 『全集』第 6 巻, 1979 年, 1~356 ページ。
 - 7) 真栄田義見『蔡温・伝記と思想』, 月刊沖縄社, 1976 年。
 - 8) 島袋は 1935 (昭和 10) 年に伊波, 真境名の後を受けて, 第三代目の沖縄県立図書館長に就任している。島袋はすでに 1912 (明治 45) 年に「羽地按司向象賢」という人物評伝を『沖縄毎日新聞』(1912 年 1 月 13 日~16 日) 紙に発表している。東恩納も蔡温を高く評価し, なかでも蔡温が著した『醒夢要論』と『俗習要論』について, 蔡温の思想を知る上で最も重要な著書であると位置付けていた。崎浜秀明「東恩納先生に蔡温を学ぶ」(『全集』付報 8, 1980 年, 2~4 ページ)。
 - 9) 島袋全発「羽地朝秀とその時代」(『琉球新報』, 1952 年 7 月 25 日)。島津氏の琉球侵攻は 1609 (慶長 14) 年であった。向象賢と蔡温は, 琉球復興に貢献したという共通性があるだけではなく, 異なる点もある。向象賢の改革は琉球の環境破壊の直接的・間接的な要因となり, 蔡温はそれに対応して環境保全につとめたという違いである。つまり向象賢の場合は薩摩の要求を満たすために, 殖産振興政策によって, それまでの東シナ海交易に基盤を置く体制から, 琉球王国内の自給経済体制へと転換する必要があった。一方, 蔡温の場合は, その殖産振興政策によって環境保全が問題となったために, 資源管理を中心に改革が展開された。三輪大介「蔡温の資源管理政策——琉球環境経済史の試み: 農務帳の林政 7 書を中心に」(『Multi-level Environmental Governance for Sustainable Development Discussion Paper』, No. J08-05, 2008 年, 1~64 ページ)。
 - 10) 田里修「「羽地仕置」に関する一考察」(『沖縄文化』, 第 25 巻 1 号, 1988 年, 1~13 ページ)。
 - 11) 東恩納寛惇「新教育の目標」(『全集』第 10 巻, 1982 年, 375~83 ページ)。これは 1951 (昭和 26) 年 9 月に沖縄群島政府文教部から日本教育視察団として派遣された沖縄の教育関係者を対象にして行なわれた講演であった(『琉球新報』, 1951 年 10 月 24 日~28 日)。
 - 12) 東恩納寛惇「新教育の目標」(『全集』第 10 巻, 1982 年, 377 ページ)。
 - 13) 伊藤陽寿『「危機の時代」の沖縄——現代を写す鑑, 十七世紀の琉球』, 新典社, 2009 年, 31~52 ページ。
 - 14) 東恩納寛惇『校註 羽地仕置』(『全集』第 2 巻, 1978 年, 143~238 ページ)。
 - 15) 東恩納寛惇『校註 羽地仕置 序』(同上書, 148 ページ)。
 - 16) 田里修, 前掲論文, 1988 年, 2~4 ページ。
 - 17) 東恩納寛惇「沖縄文化史上に於ける向象賢先生の位置」(『全集』第 4 巻, 1979 年, 349~53 ページ)。
 - 18) 同上書, 352 ページ。
 - 19) 島袋全発「書評: 東恩納寛惇著『校註 羽地仕置』」(『全集』付報 2, 1978 年, 7 ページ)。
 - 20) 同上書, 7 ページ。
 - 21) 喜舎場一隆「解題」(『全集』第 2 巻, 1978 年, 8 ページ)。
 - 22) 島袋全発「島々の帰属——しまちやびの歴史」(『島袋全発著作集』, おきなわ社, 1956 年, 45~61 ページ)。
 - 23) 東恩納寛惇「『島袋全発著作集』序にかえて」(『全集』第 9 巻, 1981 年, 282 ページ)。
 - 24) 同上書, 282~3 ページ。
 - 25) 外間正幸「人間的回想」(『全集』付報 3, 1978 年, 5~6 ページ)。
 - 26) 東恩納寛惇「わが目で見た沖縄」(『全集』第 9 巻, 1981 年, 531~3 ページ)。
 - 27) 東恩納寛惇「『島袋全発著作集』序にかえて」(同上書, 281 ページ)。

- 28) 同上書, 285~6 ページ。
- 29) 小島嬰禮「解題」(同上書, 13 ページ)。
- 30) 嶋袋全幸「思いだすことども」(『全集』付録2, 1978年, 5 ページ)。
- 31) 屋嘉比取, 前掲書, 2010年, 186~7 ページ。
- 32) 東恩納寛惇『童景集』(『全集』第5巻, 1978年, 286~7 ページ)。
- 33) 東恩納寛惇「伊波君の想出」(『文化沖縄』第1巻10号, 1949年; 『全集』第9巻, 1981年, 157~9 ページ)。
- 34) 1889(明治22)年にリースの建言により史学会が設立され, この学会の機関誌として『史学会雑誌』が創刊された。この雑誌は『史学雑誌』と改題されて今日に至っている。
- 35) ランケ著・林健太郎訳『ランケ自伝』, 岩波文庫, 1966年; レオポルト・フォン・ランケ著/鈴木成高訳『世界史概観——近世史の諸時代』(改版), 岩波文庫, 1998年; ランケ著・村岡哲訳『世界史の流れ』, ちくま学芸文庫, 1998年。ランケ以前の歴史研究者は「歴史家」とよばれるが, ランケ以降は「歴史学者」とよばれる。
- 36) 佐藤真一「解説」(ランケ著・村岡哲訳, 前掲書, 1998年, 279~83 ページ)。「個性」と「発展」に対する新しい感覚は, マイネッケ(Friedrich Meinecke, 1862-1954)によって「歴史主義」と名付けられた。
- 37) ランケ著・相原信作訳『政治問答 他一篇』, 岩波文庫, 1941年, 28~31 ページ。
- 38) 佐藤真一「解説」(ランケ著・村岡哲訳, 前掲書, 1998年, 283~7 ページ)。
- 39) 喜舎場一隆「解題」(『全集』第4巻, 1979年, 2~3 ページ)。
- 40) 東恩納寛惇『島津氏対琉球政策』(『全集』第2巻, 1978年, 1~144 ページ)。
- 41) 同上書, 28~9 ページ。
- 42) 同上書, 141 ページ。
- 43) 東恩納寛惇「想出す人・物・事」(『全集』第9巻, 1981年, 340~1 ページ); 富島壮英「書誌」(『全集』第2巻, 1978年, 11 ページ)。
- 44) この時期の主な論文は, 「歴史論考」として『全集』第1巻(1978年, 259~427 ページ)に掲載されている。
- 45) 東恩納寛惇「旧琉球の階級制度」(『全集』第4巻, 1979年, 371~84 ページ)。
- 46) 為朝は保元の乱で敗れて後, 伊豆大島へ流されるが, 国司にしたがわず, 伊豆諸島を事実上支配した。このとき追討をうけて, 一般的には自害されたとされる。しかし『中山世鑑』や『おもろさうし』などでは, 追討を逃れて琉球に渡り, その子が琉球王家の始祖舜天になったとされる。
- 47) 外崎克久『北の旅人——加藤三吾伝』, 御茶の水書房, 1982年, 44~61 ページ。加藤は1899(明治32)年に沖縄県尋常中学校に赴任しているので, 東恩納の恩師にあたる。
- 48) 東恩納寛惇「琉球の研究の一部を評して併せて為朝考の欠を補ふ」(『琉球新報』, 1907年5月18日; 『全集』第1巻, 1978年, 292~5 ページ)。
- 49) 為朝の渡来は, 肯定する側にとっては日琉同祖論の有力な根拠となっていた。したがって加藤のように伝説として否定することは, 大和と沖縄とを切り離して, その差別を助長しかねないと考えられた。
- 50) 富島壮英「書誌」(『全集』第6巻, 1979年, 12 ページ)。
- 51) 1871(明治4)年の廃藩置県によって琉球王国は鹿児島県の管轄下におかれ, 翌72(明治5)年に琉球藩が設置され, 1879(明治12)年によく沖縄県が設置された。この一連の展開を琉球処分という。これによって琉球王国は消滅した。赤嶺守『琉球王国——東アジアのコーナーストーン』, 講談社選書メチエ, 2004年, 189~213 ページ。
- 52) 東恩納寛惇「聖公会の反省を促す——歴史的遺物は歴史に返せ・文化的遺物は文化に返せ」(『全集』第8巻, 1980年, 192~3 ページ)。
- 53) 東恩納寛惇「琉球の地名人名の研究」(『歴史地理』, 第14巻4号, 1909年; 『全集』第6巻, 1979年, 592~600 ページ); 東恩納寛惇「道成寺と執心鐘入」(『沖縄毎日新聞』, 1910年5月20~24日; 『全集』第8巻, 1980年, 435~43 ページ); 東恩納寛惇「琉球の歌謡並びに音楽に就いて」(『琉球新報』, 1910年11月22日~12月1日; 『全集』第8巻, 1980年, 396~407 ページ); 東恩納寛惇「琉

- 訳聖書について」(『琉球新報』, 1912年6月5日～6日; 『全集』第5巻, 1978年, 22～34ページ); 東恩納寛惇「旧琉球の位階制度」(『歴史地理』, 第31巻1・2号, 1918年; 『全集』第4巻, 1979年, 392～410ページ); 東恩納寛惇「牧志恩河一件の真相」(『琉球新報』, 1913年12月1日～1914年1月26日; 『全集』第4巻, 1979年, 423～33ページ); 東恩納寛惇「六論衍義に就いて」(『史学雑誌』, 第35編9号, 1924年; 『全集』第8巻, 1980年, 101～13ページ)。
- 54) 神山政良「古武士のような人」(『全集』付報2, 1978年, 3～4ページ)。
- 55) この7人の委員会は七人会と称して、戦後も長く集まりをもち、沖縄問題を内外に喚起する役割をもった。
- 56) 東恩納寛惇『尚泰侯実録』(『全集』第2巻, 1978年, 239～517ページ)。
- 57) 東恩納寛惇『琉球人名考』(『全集』第6巻, 1979年, 357～478ページ)。
- 58) 東恩納寛惇「維新前後の琉球」(『全集』第5巻, 1978年, 4～21ページ)。これは1926年11月に維新史研究会での講演録である。
- 59) 喜舎場一隆「解題」(『全集』第2巻, 1978年, 6～7ページ)。
- 60) 東恩納寛惇「維新前後の琉球」(『全集』第5巻, 1978年, 20～1ページ)。
- 61) 大藤時彦「東恩納先生の追憶」(『全集』付報3, 1978年, 2ページ)。
- 62) 島尻勝太郎「解題」(『全集』第6巻, 1979年, 4ページ)。
- 63) 『中山世譜』は琉球王国の歴史書のひとつである。漢文で書かれた歴代国王の伝記を中心にして、中国との関係をまとめた部分(正巻)と、大和(主に薩摩)との関係をまとめた部分(附巻)とに分かれている。1697年に編纂が始まり、『中山世鑑』を漢文に訳して、部分的に修正をほどこし、1701年に完成している。
- 64) 東恩納寛惇『琉球人名考』(『全集』第6巻, 1979年, 364～410ページ)。
- 65) 東恩納寛惇『琉球人名考 自序』(同上書, 359ページ)。
- 66) 島尻勝太郎「解題」(同上書, 5ページ)。『冊封使録』については、島尻勝太郎「冊封使録概説」(『興南研究紀要』, 第2号, 1973年); 東恩納寛惇「冊封使録」(『全集』第5巻, 1978年, 141～3ページ)。冊封使とは、中国皇帝が周辺諸国の首長を国王に任命するために派遣した勅使のことである。琉球には1404～1866年の間に、24回(明代16回, 清代8回)派遣された。赤嶺守, 前掲書, 2004年, 171～87ページ)。
- 67) 東恩納寛惇「本県郷土史の取扱に就いて」(『沖縄教育』, 第199号, 1933年; 『全集』第1巻, 1978年, 415～27ページ)。
- 68) 同上書, 418ページ)。
- 69) 交易史については、紙屋敦之『琉球と日本・中国』, 山川出版社, 2003年)。
- 70) 東恩納寛惇『琉球の歴史』(『全集』第1巻, 1978年, 1～150ページ)。
- 71) 東恩納寛惇「琉球の最後」(同上書, 141～4ページ); 東恩納寛惇「日本敗戦のしわよせ琉球, 宿命の二十九度線」(同書, 144～6ページ)。
- 72) 東恩納寛惇「海の沖縄人」(『暁鐘』, 第91号, 1914年); 『全集』第1巻, 1978年, 327～32ページ)。
- 73) 伊波も明治維新や廃藩置県に相当する「琉球処分」を一種の奴隷解放であったと述べているので、東恩納もほぼ同様の主張をしていたといえる。伊波普猷「琉球人の解放」(『伊波普猷全集』第1巻, 平凡社, 1974年, 491～5ページ)。
- 74) 喜舎場一隆「解題」(『全集』第2巻, 1978年, 1～9ページ)。
- 75) 東恩納寛惇『概説 沖縄史』(『全集』第1巻, 1978年, 151～93ページ)。
- 76) 東恩納寛惇『沖縄涉外史』(同上書, 195～37ページ)。
- 77) 清朝に外国使節が来訪した場合、それに付随して貿易を行なわれた。外国使節の入国地点は決められていた。琉球は福州とされ、この入国地点は交易の地ともなった。吉澤誠一郎『清朝と近代世界 19世紀』, 岩波新書, 2010年, 9ページ)。
- 78) 曾根信一「解題」(『全集』第5巻, 1978年, 1ページ)。
- 79) 東恩納寛惇「沖縄県人の立場より」(沖縄文学全集編集委員会編『沖縄文学全集 第14巻 記録・証言 I』, 国書刊行会, 2010年, 306～7ページ)。

- 80) 喜舎場一隆「解題」(『全集』第4巻, 1979年, 3~4ページ)。
- 81) 東恩納寛惇『琉球の歴史 はしがき』(『全集』第1巻, 1978年, 3ページ)。
- 82) 東恩納寛惇「地割制」(『全集』第4巻, 1979年, 356~70ページ)。地割制と史料の関係については、拙稿「仲吉朝助の勸農論——沖縄農業研究の端緒」(『京都産業大学論集人文科学系列』, 第36号, 2007年, 159~62ページ)。農地の所有と利用については、仲地宗俊「沖縄における農地の所有と利用の構造に関する研究」(『琉球大学農学部学術報告』, 第41号, 1994年, 1~126ページ)。
- 83) 田名網宏「東恩納先生の思い出」(『全集』付報2, 1978年, 2ページ)。
- 84) 著書の序文に「東亜共栄圏史建設の素材となり得る事を信ずる」(『全集』第3巻, 1979年, 7ページ)という文言がみられるが、当時の状況から考えて、時流に迎合した面があったことは否めない。
- 85) 東恩納寛惇『黎明期の海外交通史』(『全集』第3巻, 1979年, 1~350ページ)。
- 86) 戦前期に『歴代宝案』に依って行なわれた研究の成果には、秋山謙蔵『日支交渉史』, 小葉田惇『中世南島通交貿易史の研究』, 安里延『沖縄海洋発展史(日本南方発展史序説)』などがある。若生成一「東恩納教授と東南アジア通交貿易史の研究」(『全集』付報8, 1980年, 1~2ページ)。
- 87) 高良倉吉『琉球王国』, 岩波新書, 1993年, 90~2ページ; 赤嶺守, 前掲書, 2004年, 128~31ページ。
- 88) 与那原恵『美麗島まで——沖縄, 台湾, 家族をめぐる物語』, ちくま文庫, 2010年, 209~12ページ。
- 89) 東恩納寛惇『黎明期の海外交通史 序にかへて』(『全集』第3巻, 1979年, 7ページ)。
- 90) 島尻勝太郎「解題」(同上書, 6ページ)。
- 91) 東恩納寛惇「芋の話」(『全集』第8巻, 1980年, 323~39ページ)。
- 92) 白鳥芳郎「南島文化史研究と家譜資料」(『全集』付報9, 1981年, 1ページ)。
- 93) 小島嚶禮「解題」(『全集』第8巻, 1980年, 1~6ページ)。
- 94) 東恩納寛惇『六論衍義伝』(同上書, 1~92ページ)。
- 95) 東恩納寛惇「六論衍義に就いて」(同上書, 101~13ページ)。
- 96) 東恩納寛惇『六論衍義伝』(同上書, 7ページ)。
- 97) 東恩納寛惇「六論衍義物語」(同上書, 124~34ページ)。
- 98) 吉田嗣延「概説沖縄史」と「沖縄渉外史」の周辺(『全集』付報6, 1979年, 6ページ)。
- 99) 嘉手納宗徳「解題」(『全集』第7巻, 1980年, 1~3ページ)。
- 100) 東恩納寛惇『南島風土記』(同上書, 4ページ)。
- 101) 霜多正次「『南島風土記』を座右に」(『全集』付報7, 1980年, 3~4ページ)。
- 102) 東恩納寛惇『沖縄渉外史』(『全集』第1巻, 1978年, 199ページ)。
- 103) 同上書, 237ページ。
- 104) 島袋全幸「新おもろ学派のこと」(『沖縄文化』, 第46号, 1976年)。研究会は「沖縄神歌学会」として発足したものであり、これが再組織されて「おもろ研究会」になったという指摘もある(末次智『琉球の王権と神話』, 第一書房, 1995年)。
- 105) 島袋全発「オモロ研究の二大収穫」(『琉球新報』, 1932年11月17日付)。
- 106) 東恩納寛惇「『おもろ』の父伊波君の研究態度を讃仰して『おもろ』新人諸君に一言す」(『全集』第9巻, 1981年, 154ページ)。
- 107) 屋嘉比収, 前掲書, 2010年, 129ページ。
- 108) 鹿野政直『沖縄の淵』, 岩波書店, 1993年, 233~5ページ。
- 109) 伊波普猷「つきしろ考——オモロの民俗学的研究」(『琉球新報』, 1933年1月22日~2月10日; 伊波普猷『伊波普猷全集』第5巻, 平凡社, 1974年, 247ページ)。
- 110) 真境名安興「一九三二年を送る/新おもろ学派の華やかな出発」(『沖縄日日新聞』, 月日不明; 屋嘉比収, 前掲書, 2010年, 130ページ)。
- 111) 『全集』第5巻, 1978年, 159~311ページ。
- 112) 真栄田義見「童景集を読んで」(『全集』付報3, 1978年, 3~4ページ)。
- 113) 又吉康和「童景集の再版に就て」(『琉球新報』, 1952年8月5~7日; 『全集』付報3, 1978年, 7ページ)。
- 114) 東恩納寛惇『沖縄今昔』(『全集』第5巻, 1978年, 405~6ページ)。『沖縄今昔』は1957(昭和

- 32) 年に約1年間にわたって旬刊紙「沖縄と小笠原」に連載されたものである。
- 115) 拙稿「謝花昇の農業思想——沖縄と近代農学の出会い」(『京都産業大学論集人文科学系列』, 第35号, 2006年, 25~54ページ); 拙稿「仲吉朝助の勸農論——沖縄農業研究の端緒」(『京都産業大学論集人文科学系列』, 第36号, 2007年, 145~71ページ); 拙稿「太田朝敷の地域発展論——沖縄の「独立自尊」をめぐる」(『京都産業大学論集人文科学系列』, 第40号, 2009年, 135~74ページ)。
- 116) 高嶺明達「資料 南島風土記に寄す」(『全集』付報7, 1980年, 7ページ)。
- 117) 石川政秀「東恩納先生との出会い」(『全集』付報10, 1982年, 4ページ)。
- 118) 東恩納寛惇「わが目で見た沖縄」(『全集』第9巻, 1981年, 528~38ページ); 東恩納寛惇「成長した沖縄」(同書, 539~45ページ); 東恩納寛惇「この目で見た沖縄」(同書, 546~66ページ)。
- 119) 小島嬰禮「解題」(同上書, 12ページ)。
- 120) 谷川健一『沖縄——その危機と神々』, 講談社学術文庫, 1996年, 69~70ページ。
- 121) 高良倉吉, 前掲書, 1998年, 94~117ページ; 比嘉政夫『沖縄からアジアが見える』, 岩波ジュニア新書, 1999年。

Kanjun Higaonna and the Development of Okinawa Historical Study

Nobuhisa NAMIMATSU

Abstract

Kanjun Higaonna (1882-1963) is the representative researcher of the Okinawa history in modern Okinawa. He was affected by the German positivism historical study in Tokyo Imperial University. He took the birch in Hosei University and Takushoku University after graduation from university. At the same time, He did document collection about the Okinawa history and left many results of research. There are many studies about his study achievements, but there are few studies that took himself up. This article follows his career and thinks about the process when his historical study was formed.

Higaonna was the researcher who did a substantial history study all the time. His study achievements are divided into four mainly. (1) the study about the trade of Ryukyu, (2) the study of the place name and the person's name, (3) the study about the culture of Ryukyu, (4) revision and an explanatory note of the main classics. He continued living in Tokyo and left many study achievements. When Japan thought about postwar Okinawa problem, his historical study served as a reference.

It was difficult for him to establish history for the reason of not having the present conditions recognition of the native district. He repeated a forcible remark, because he had sense of impending crisis for the present conditions. He demanded mental independence for people of Okinawa.

The Okinawa historical study of Higaonna had strong native district consciousness. However, he put his heart and soul into positivism without depending on native district consciousness. His study elucidated relations with Asia. It was a study of the pioneer.

Keywords: Kanjun Higaonna, Okinawa historical study, Ryukyu historical study, Positivism historical study, History of Okinawa public relations